

**連載****天文史跡めぐり【7】****青森県・北海道地方の天文史跡めぐり**

松村 巧（山口県下松市）  
松尾 厚（山口県立山口博物館）

**1. はじめに**

天文史跡めぐりの最終回は青森県と北海道である。礼文島の金環日食観測記念碑、標茶町郷土館を除いては、ここ1~2年の間に現地を確認している。

**2. 青森県**

(1)弘前藩稽古館（弘前市下白銀(しもしろがね)町、弘前城内三の丸）

稽古館は寛政8年(1796)夏に完成した弘前藩の藩校で、文化5年(1808)に弘前城内の三の丸へ移転した（図1）。この藩校では藩士の教養として天文暦学の教育がなされ、天文台もあり、主に学生の教育・実習用に使われたようだ。天文の教官は2名程度で、教育内容は当時としても時代に遅れたものであったが、ここで編纂した略暦は毎年教官や学生に頒布され、「稽古館暦」あるいは「弘前暦」と呼ばれて現存している。[1]、[2]



図1 弘前城追手門（重要文化財）。ここを入って正面から右手奥にかけてが、移転後の稽古館があった三の丸になる。

(2)故一戸博士之碑（西津軽郡木造(きづくり)

町大字吹原、吹原小学校旧校舎跡地）

この碑は明治後期から大正初期にかけて活躍した天文学者、科学ジャーナリストの一戸直蔵(いちのへ なおぞう)を顕彰したもので、大正15年(1926)に建立された（図2）。

一戸は明治11年(1878)に越水村(こしみずむら：現・木造町南西部)吹原に生まれ、明治22年(1889)に吹原小学校を卒業した。東京帝国大学星学科卒業後、官費留学の順番を待ちきれずに明治38年(1905)から2年間、アメリカ・ヤキス天文台へ私費留学している。日本人として初めて発展期にあるアメリカの巨大天文学に接し、感化を受けて帰国、東京天文台（現・国立天文台）に勤務した。

明治44年(1911)には、主に変光星に関する研究で学位を得たが、当時の東京天文台長 寺尾寿(ひさし)らと意見が合わないことが原因となって、同年末には東京天文台を追われ、その後は科学ジャーナリストとして活躍する。イギリスの科学誌 Nature を範とした「現代之科学」を創刊するが経営は順調に行かず、病のため大正9年(1920)に42歳で没している。

一戸は日本天文学会の創立（明治41年(1908)）に尽くし、天文月報の初代編集主任として天文学の普及に努めた。日本天文学会は創立時からアマチュア天文家が多数加わっている。さらに数多くの普及書を著すなど天文学普及への貢献は大きい。天文学者が一般向けの普及書を出版したのは、日本では彼が最初だという。

JR五能線越水駅の北方4km(木造駅の西北西7km)に、木造町南広森の集落がある。

吹原小学校旧校舎跡は、この集落の南はずれにあり、吹原簡易郵便局の南 100mほどのところである。簡易郵便局と同じ道路（県道 12 号線のすぐ西側の道路）に面し、今は吹原農村公園という狭い公園になっているが、かなり荒れている。この旧校舎跡地に高さ 4 m ほどの立派な石碑「故一戸博士之碑」が建つ。なお、吹原小学校の新校舎はここから 1 km 北方にあるが、これも平成 14 年(2002)3 月に廃された。[3]、[4]



図2 故一戸博士之碑。この碑の隣（右側）

には、ほぼ同じ大きさの大澤正毅翁の顕彰碑が建っている。大澤翁は一戸博士の吹原小学校時代の恩師で、有徳の教育者だったらしい。一戸博士之碑の左手（東側）方向に県道 12 号線がある。

### 3. 北海道

#### (1)開拓使三角測量勇払基点(苫小牧市字勇払132、勇払ふるさと公園内)

開拓使（北海道の開拓経営のために置かれた各省と同格の官庁）は、正確な北海道地図を作成するため明治 6 年(1873)3 月、アメリカ人 J. R. ワッソンを測量長に命じ洋式の三角測量を開始した。ワッソンは基線場を勇払原野に定め、翌 7 年(1874)からは彼の業務を引き継いだアメリカ人 M. S. デイらが勇払基

線の精測を始めた。勇払基点の経緯度は天文測量により北緯 42 度 37 分 34 秒、東経 141 度 44 分 46 秒と求められた。基線はここから東南東の勇払郡鶴川（むかわ）町方向に延び、基線長は 14,860m 余と測定されている。

勇払基点の石柱が昭和 37 年(1962)に市立勇払中学校校庭で発見され、文化財指定を受けたことにより敷地の確保と整備が進められた。勇払基点は勇払中学校の北東隣にあって、JR 日高本線勇払駅から東へ 300m ほどの道道 781 号線沿い（西側）にある。勇払基点一帯は「勇払ふるさと公園」として整備され、基点はその北西端に位置している（図3）。園内には勇払地域に関する資料館（勇武津（ゆうぶつ）資料館：苫小牧市字勇払 132-32）があり、勇払基線の資料も展示されている。もう一方の鶴川基点については未発見であるが、この勇払基点はわが国における最初の本格的三角測量の着手点として、測量学・測地天文学上、貴重な史跡である。なお、本州における最初の本格的基線は栃木県の那須基線である（文献[7]那須基線の項参照）。[5]、[6]、[7]

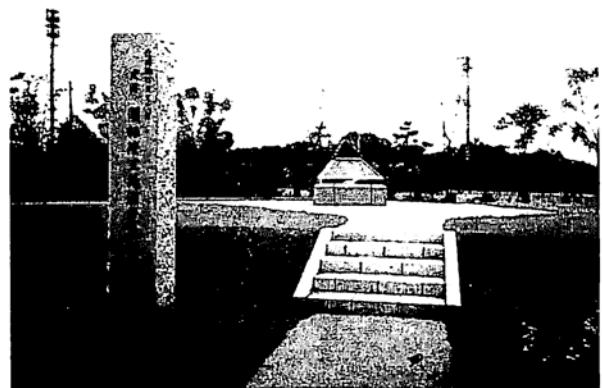


図3 開拓使三角測量勇払基点（北海道指定史跡）。写真中央の三角錐状の設備（高さ約 1.7m）の中に基点石柱が保存され、それをガラス越しに見ることができる。勇払基線はここから右方（東南東方向）へ延びている。

(2) クラーク博士像(札幌市北区北9条西7丁目、北海道大学構内／豊平区羊ヶ丘1番地、さっぽろ羊ヶ丘展望台)

ウィリアム・スミス・クラーク博士(1826-1886)は教育者として名高く、明治9年(1876)に札幌農学校初代教頭として招かれた。アメリカへ帰国の際、見送りの学生達に残したと言われる「Boys, be ambitious!」の言葉は、あまりにも有名である。

彼はアメリカ、マサチューセッツ州に生まれ、ドイツのゲッティンゲン大学に学び、1852年には同大学から博士号を得ている。学位論文のタイトルは「On Metallic Meteorites」(金属質隕石について)であった。論文誌に掲載されたその内容は、4個の鉄隕石を化学分析して鉄隕石がどのような元素から成り立っているかを明らかにしたもので、隕石の化学的研究において先駆者的役割を果たしたという(早川氏による)。クラーク博士の「博士」は、「隕石」博士だったのである(図4)。[8]



図4 クラーク博士像。これは昭和51年(1976)に博士の生誕150年を記念して、羊ヶ丘展望台に建てられたもの。本家?の北海道大学のものは(古河記念講堂前)は、胸像(昭和23年(1948)再建)である。

(3) 旧日本郵船株式会社小樽支店(小樽市色内(いろない)3-7-8)

日露戦争の後、明治38年(1905)にアメリカ

のポートマスで講話条約が結ばれ、樺太の北緯50度以南が日本領となった。これに基づき日露両国の国境画定会議が幾度か開催され、国境は天文緯度で画定することとされた。明治39年(1906)11月には、この国境画定会議が新築直後の日本郵船小樽支店2階会議室で開かれ、日本側属員として東京帝国大学星学科助教授(後に教授)の平山清次(きよつぐ:1874-1943)が加わっている。

樺太では北緯50度付近の4か所で天測が行われ、北緯50度(天文緯度)の通過地点が定められた。国境には天測境界標石(4か所)と17基の中間標石が埋設され、森林を幅10m、延長約130kmにわたって伐採して国境とした。この時の天測作業の中心人物も平山清次である。

旧日本郵船小樽支店は、明治39年(1906)10月に完成した石造2階建ての建物で、現在は会議室など内部を復元して一般公開されている。2階には国境画定会議に関する資料などの展示もある(図5)。場所はJR小樽駅の北北東1.2kmのところで、建物は国の重要文化財に指定され小樽の観光名所になっている。[9]、[10]、[11]



図5 旧日本郵船小樽支店(重要文化財)

(4) 沼貝(ぬまかい)隕石落下地(美唄市光珠内(こうしゅない)町、光珠内駐在所付近)

沼貝隕石(別名、光珠内隕石)は、大正14年(1925)9月4日(5日の説もある)午後4

時過ぎ、美唄市（当時は沼貝町）の畠地（字光珠内 350 番地）に落下した重さ 360 g ほどのコンドライトで、北海道で発見された唯一の隕石である。当時の新聞は「沼貝に隕石落下、黒色の三角形石塊、中天に尾を曳いて」

（北海タイムス、大正 14 年 9 月 6 日）などと報じている。すぐ近くの小川沿いの笹原にも隕石が落下したので、1か月ほど探したが発見できなかったという。

現在、落下地近くの光珠内駐在所北隣には沼貝隕石の解説板が建っている（図 6）。光珠内駐在所は J R 函館本線光珠内駅の東北東 250m のところにあり、国道 12 号線に面している。沼貝隕石そのものは美唄市の文化財（天然記念物）に指定され、美唄市郷土史料館（美唄市西 2 条南 1-2-1）に展示されている。[12]、[13]、[14]

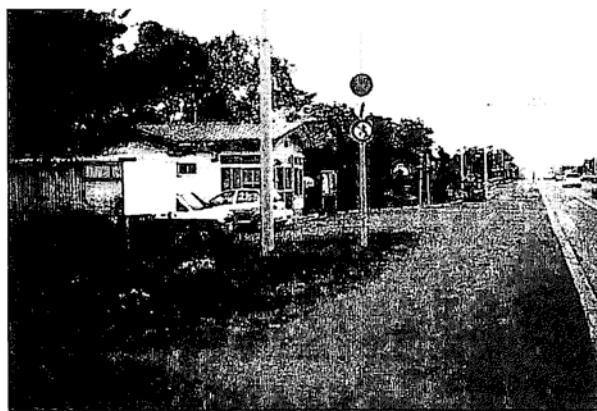


図 6 光珠内駐在所。この付近が沼貝隕石の落下地である。左の白い看板が沼貝隕石の解説板。落下地点はこの解説板の約 200m 後方（東寄り）になるようだ。写真右側の道路は国道 12 号線で、奥方向（南側）が札幌方面である。

(5) ノチウ（星）という岩（上川郡鷹栖町（たかすちょう）北野、石狩川の中州）

オサラッペ川という小さな川が石狩川に合流する地点、旭川市と鷹栖町の境界付近の中州に、高さ 10m ほどの岩が突き立っている。この岩は、古くからアイヌの人たちが「ノチ

ウ」（アイヌ語で「星」の意）と呼び、隕石が地上に降って岩になったと伝えられている（図 7）。もちろんこの岩は隕石ではなくて赤色珪岩とのことだが、このノチウをアイヌの人々は隕星石として尊崇していたという。

石狩川の中州なのでこの岩へ行くことは困難だが、付近の石狩川北岸にはサイクリング道路が整備されており、そこから川岸に下りて間近に眺めることができる。また、函館本線の列車がオサラッペ川に架かる鉄橋を渡る時に、短い時間ではあるが車窓から見ることもできる。この鉄橋は旭川駅から 1 つ札幌寄りの近文（ちかぶみ）駅の 1.2km 先（札幌方）にあり、札幌方面から来る場合には、伊納駅を過ぎ、嵐山トンネルという長いトンネルを抜けた直後になる。[15]、[16]



図 7 石狩川中州にあるノチウ。川岸に下りて見ると、なるほど名前が付きそうな目立つ岩である。この写真はサイクリング道路から撮影したもので、左手（東側）が石狩川の上流、対岸の丘の上に見える建物（塔が建つ）は、北海道東海大学である。カメラ位置の背後を函館本線が走り、左手後方からオサラッペ川が流れ込んでいる。

(6) 日食観測記念碑など

明治以降、北海道では、明治 5 年（1872：金環）、明治 29 年（1896：皆既）、昭和 11 年（1936：皆既）、昭和 18 年（1943：皆既）、昭

和 23 年（1948：金環）、昭和 38 年（1963：皆既）と、6 回の中心日食が見られた。このうち明治 29 年以降の日食については専門家の観測が行われている。ここでは、これらの日食観測記念碑などを紹介する。[17]

#### ①枝幸（えさし）町の皆既日食観測記念碑（枝幸郡枝幸町）

枝幸町では明治 29 年（1896）8 月 9 日と昭和 11 年（1936）6 月 19 日の 2 度にわたり皆既日食が見られた。いずれも専門家の観測隊が布陣し、明治 29 年の皆既日食ではアメリカ、フランス、日本の観測隊がこの地で観測を行っている。各国の隊長は、米国がアマースト大学教授ダビッド・トッド、フランスがパリ天文台長デランドル、日本は初代東京天文台長の寺尾寿（ひさし）であった。

米国隊はコロナなど日食の写真を多数撮影すること、フランス隊はコロナが太陽と一緒に自転するか否か、つまりコロナは太陽に付属しているかどうかの検証を主目的としていた。日本隊は町はずれのウエンナイ（現・枝幸町幸町（さいわいちょう）付近）で写真撮影などを試みたが、いずれの隊も雲に阻まれて観測は成功しなかった。

枝幸町の日食記念碑は、この明治 29 年の 3 か国の観測を記念したもので、フランスの観測隊が布陣した枝幸町本町 590-1（枝幸町商工会館前）に、枝幸町によって昭和 62 年（1987）に建立された。ステンレス製の記念碑は高さ約 2.7m（台座を含む）、正面から見ると円形（太陽光球の形）に、側面から見ると太陽を取り巻くコロナの形に見えるという面白いデザインである（図 8）。商工会館は町役場、町立図書館、枝幸消防署などが集まっている町の中心部にあり、役場の東北東 150m のところである。

また、枝幸滞在中の村民の好意に感謝したアメリカのトッド博士は、帰国後枝幸へ図書を送り続け、このことが明治 36 年（1903）の北

海道最初の公立図書館（現・枝幸町立図書館）開館へとつながった。日食観測が縁で創立された稀有の図書館である。トッド博士は図書館開設後も 15 年間、延々と図書を送り続けたという。このことを永く伝えるため、米国隊の観測記念碑が枝幸町立図書館（枝幸町本町 880-3）正面入口脇に建てられている。記念碑は金属製の解説板をコンクリートの台座に取り付けたもので、高さ 1.2m ほどである。なお、トッド博士と枝幸図書館開館に関する感動的な物語が、文献 [21] に転載されている。[17]、[18]、[19]、[20]、[21]

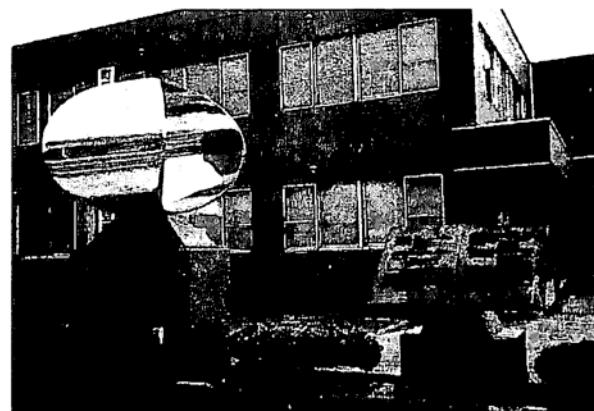


図 8 枝幸町商工会館前の日食記念碑

#### ②標茶町（しべぢや）郷土館のコロナ写真（川上郡標茶町塘路（とうろ））

明治 29 年（1896）8 月 9 日の皆既日食に際しては、専門家は枝幸、厚岸（あっけし）などに布陣したが、いずれも天候が悪く観測できなかった。ところが皮肉なことに、例年は天候が悪いとして専門家が敬遠した標茶が晴れてしまった。標茶の写真家島田清兵衛は、皆既中のコロナ写真を撮影している（図 9）。これは日本の非専門家による最古級のコロナ写真であろう。この写真は常時展示はされていないが希望者は閲覧することができる。

標茶町郷土館は塘路湖の西端、JR 釧網本線塘路駅（標茶駅から塘路方へ 3 駅目）の東方 700～800m のところにある。[19]、[22]、[23]、[24]、[25]

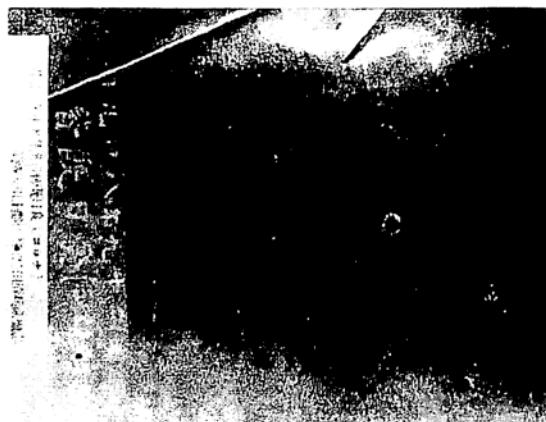


図9 標茶町郷土館のコロナ写真（標茶町郷土館蔵）

③中頓別小学校の皆既日食観測記念碑（枝幸郡中頓別町字中頓別、町立中頓別小学校内）  
中頓別町も明治29年(1896)と昭和11年(1936)の二回、皆既日食帯が通過し、昭和11年6月19日の日食に際しては専門家による観測隊が布陣した。中頓別小学校の校庭では、東京天文台、京都帝国大学花山天文台、チェコスロバキアとオーストリアの観測隊が観測を行った。当日は雲がかなりあったようだが、幸い皆既中は雲にかかることなく観測は成功している。中頓別小学校の碑は、この昭和11年の皆既日食観測を記念したものである。

記念碑は校舎北西端の児童用玄関脇にあって、アルミ板に観測風景とコロナの写真を印刷し、簡単な解説を付したものである（図10）。この碑は平成4年(1992)に作られたが、それ以前にも同校には木製の記念柱が建てられていたようだ。[19]、[26]、[27]



図10 中頓別小学校の皆既日食観測記念碑。

高さは1.2mほどである。

④小清水小学校の日食観測所跡（斜里郡小清水町字小清水662番地、町立小清水小学校内）

小清水町も明治29年(1896)と昭和11年(1936)の皆既日食帯が通過し、昭和18年の皆既帯にも含まれていた。昭和11年6月19日の日食に際しては、東北帝国大学の松隈健彦教授（まつくまたてひこ：1890-1950、東北帝大天文学講座の初代担当者）らが、小清水小学校で口径20cm、焦点距離5mの望遠鏡を使用してアインシュタイン効果の観測を行った。

小清水小学校には当時の観測台座が残っており、観測記念碑が建てられている。記念碑は「日食観測所跡」と刻まれた高さ1mの黒っぽい石碑で、昭和43年(1973)に開町50周年を記念して作られたものである。当時の観測台と伝えられるものは高さ60cm余のコンクリート製の台で、端部は四角柱状に30cmほど高くなっている（図11）。記念碑と観測台は、小清水小学校敷地の北側、校舎とグラウンドの間（グラウンドの北西端）にあるが、これらは校舎改築時に数10m移動させたとのことである。[17]、[19]、[27]、[28]、[29]、[30]、[31]、[32]



図11 小清水小学校の日食観測記念碑（中央）と観測台（左）。写真左奥が校舎側、手前がグラウンド側である。

⑤礼文島の金環日食観測記念碑（礼文郡礼文町起登臼（きとうす））

昭和 23 年(1948)5 月 9 日の金環食帯は礼文島中央を通ったが、礼文島での金環食帯の幅は約 1 km と非常に狭く、金環食継続時間も 1 ~ 2 秒という限りなく皆既食に近いものであった。この日食は第二次大戦後わが国で初めての中心食で、天文だけでなく、気象、地球物理、通信などの分野でも大規模に観測が行われた。当時は戦後の混乱期だったが、この金環食は研究の方向を失っていた日本の研究者を刺激するのに大いに役立ったという。

礼文島では、東京天文台(現・国立天文台)、緯度観測所(現・国立天文台水沢観測センター)、京都大学などのチームが観測を行った。アメリカ地理学協会からもオキーフ博士の一一行が訪れ、日本とアメリカの測地三角網を結びつける目的で観測を実施している。

東京天文台の広瀬秀雄(1909~1981、後に台長)は、日本の星食観測から求めた月の位置が諸外国の観測から求めた位置と系統的にずれていることを発見しており、この原因を東京麻布の日本経緯度原点における鉛直線偏差によるものと考えていた。原点の鉛直線偏差のために、世界の測地系と日本の測地系で経緯度の違いが生じているというのである。広瀬氏はこの考えに基づき、礼文島における金環食帯中心は従来の計算よりも約 1 km 南を通過すると推定した。このままでは金環食帯に行つたつもりの観測隊が、部分食しか観測できなくなるかもしれない。結局、アメリカ、日本の観測隊とともに広瀬氏の予報に従い、南へ観測位置を移動して当日の観測は成功した。広瀬氏の考え方の正しさが立証されたのである。

この記念碑は礼文町役場から北へ約 7 km の道道 40 号線沿いにあって(礼文島のほぼ真ん中の東海岸)、地形図や道路地図にも記載されている。現在の記念碑は、道路改良工事のため平成 13 年(2001)6 月に旧記念碑(昭和 29 年(1954)建立)の道路を挟んで向かい側(海側)に新設されたものである。高さ 1.2

~ 2 m の柱 5 本に、金環日食の様子をデザインした現代風のモニュメントである(写真：<http://www.dosanko.co.jp/rebun/kankou/nisssyoku.html>)。[17]、[33]、[34]、[35]

#### 4. おわりに

この連載は著者の一人の松村がこれまでに書き貯めてきた原稿を基に、主に松尾が現地確認と記載事項の精査を行って加筆修正したものである。執筆にあたっては連載各号の文末に掲げた参考文献以外にも、多数の書籍・報告文、現地の解説文、関係者からの教示、ウェブの情報などを参考にしている。これらの著者の方々にお礼申し上げる。北海道編についても、参考文献として挙げた私信の他に、枝幸町商工課、枝幸町立図書館、中頓別小学校などから丁寧な教えを頂いた。

連載で取り上げた史跡はその重要性において軽重さまざまであり、日本各地にはもっと意義深い史跡も存在すると思われるが、本稿が地域の天文史に関心を持つきっかけとなり、天文教育や郷土学習の題材として役立つことがあれば幸いである。本連載の素稿となった「日本天文史跡案内」(文献[36])では、日本全国 300 箇所以上の史跡を取り上げている。関心を持たれた方は著者まで連絡いただきたい。

終わりにあたり 2 年以上に渡って連載にお付き合いくださった読者の皆様と、無理を聞き入れていただいた編集部の方々にお礼申し上げます。

#### 参考文献

- [1] 渡辺敏夫, 1987, 「近世日本天文学史(下巻)」, 500~501, 恒星社厚生閣
- [2] 百年社(編), 1978, 「日本の暦大図鑑」, 45, 新人物往来社
- [3] 佐久間精一, 1991, 「一戸直蔵博士」, 星の手帖, 1991 年秋号, 77~83, 河出書房新社

- [4]中山茂, 1989, 「一戸直蔵」, リブロポート
- [5]山岡光治, 1996, 「訪ねてみたい地図測量史跡」, 3, 古今書院
- [6]苫小牧市教育委員会社会教育課(編), 1980, 「苫小牧市の指定文化財」, 1-2, 苫小牧市教育委員会
- [7]松村巧, 松尾厚, 2003, 「関東地方の天文史跡めぐり」, 天文教育 Vol. 15, No. 3, 26-32
- [8]早川和夫, 1977, 「素顔の北極星」, 100-101 及び 230-243, 北海道新聞社
- [9]早川和夫, 1976, 「天文測量による国境線の劃定」, 天文月報, Vol. 69, No. 6, 175-181
- [10]文献[5], 60
- [11]広瀬秀雄, 1979, 「平山清次先生伝」, 星の手帖, 1979年秋号, 10-16, 河出書房新社
- [12]早川和夫, 1965, 「光珠内隕石の研究」, 学園論集, No. 9, 23-43, 北海道学園大学
- [13]北海道新聞社, 1979, 「郷土史の1ページから」, 北海道新聞, 1979年5月21日号, 16
- [14]福島久雄, 1981, 「北海道天文史断片(10)沼貝(又は光珠内)隕石」 PLEIADES, No. 16, 3-8, 札幌天文同好会
- [15]斎藤建二, 1981, 「ノチウの今昔」, 博物館だより, No. 47, 2-3, 市立旭川郷土博物館
- [16]旭川市史編集委員会(編), 1960, 「旭川市史第四巻」, 395-405, 旭川市役所
- [17]斎藤国治, 篠沢志津代, 1966, 「明治以降わが国の天文および地球物理学者がおこなった日食観測の記録」, 東京天文台報, 第52号, 第14巻第1冊, 1-78
- [18]著者不詳, 1936, 「1936年6月19日の皆既日食観測隊一覧表(付・北海道皆既日食地図)」, 天界, No. 182, 284-285
- [19]斎藤国治, 篠沢志津代, 1970, 「明治29年(1896)8月9日の皆既日食観測についての調査」, 東京天文台報, 第56号, 第15巻第1冊, 12-54
- [20]日塔聰(編著), 1967, 「枝幸町史(上巻)」, 671-729, 北海道枝幸町
- [21]著者不詳, 1936, 「枝幸図書館の由来」, 天界, No. 182, 318-322
- [22]文献[20], 689
- [23]松村巧, 2002, 「明治29年(1896)8月9日の皆既日食の写真」, 天界 Vol. 83, No. 12, 699
- [24]著者不詳, 1936, 「40年前の日食を見た話」, 天界, No. 182, 302
- [25]標茶町郷土館, 2002, 私信
- [26]小山秋雄, 1936, 「中頓別に於ける日食観測(1)-(4)」, 天界 No. 184, 388-391, No. 185, 429-433, No. 186, 466-469, No. 188, 61-64
- [27]北海道庁(編), 1937, 「昭和11年皆既日食誌」, 北海道庁
- [28]著者不詳, 1943, 「1943年日蝕と月蝕」, 天界, No. 259, 8-9
- [29]佐登兒, 1936, 「北海道日食観測隊を訪ねて」, 天界, No. 183, 354-357
- [30]中山茂編, 1983, 「天文学人名辞典(現代天文学講座別巻)」, 293, 恒星社厚生閣
- [31]松隈健彦, 1936, 「6月19日の日食観測の結果報告(予報)」, 日本天文学会要報, 第5巻, 第1冊, 40-47
- [32]小清水町立小清水小学校, 2002, 私信
- [33]広瀬秀雄, 1967, 「宇宙をみる」(旺文社新書), 91-92, 旺文社
- [34]古在由秀, 1973, 「地球をはかる」(岩波科学の本7), 77-82, 岩波書店
- [35]礼文町水産観光課, 2003, 私信
- [36]松村巧, 1998, 「日本天文史跡案内」, 私家版(山口県下松市)



松村 巧



松尾 厚

pxa02070@nifty.ne.jp

☆ ちょっと気になる天文用語 ☆ 福江 純（大阪教育大学）

### 75 マグネター (magnetar)

非常に強い磁場をもった中性子星、いわば超強力なパルサーのことを、最近では、「マグネター (magnetar)」と呼ぶことがある。“磁場の(magnetic)”と“星(star)”の合成語、だと思う。

X線やガンマ線の観測が進み、ガンマ線バースト源に一部に、数十 keV(キロ電子ボルト)付近の硬X線／軟ガンマ線領域で爆發現象を繰り返す天体、「軟ガンマ線リピーター (soft gamma-ray repeater; SGR)」が見つかった。これらは中性子星が起源であり、とくに磁場が強い中性子星らしい。

たとえば、SGR 1806-20という天体は、1秒足らずの非常に継続時間が短い軟ガンマ線バーストを繰り返し発生する天体だが、1996年になって、7.47秒の自転周期のパルサーであることがわかった。しかもその自転周期は毎年 0.0026秒もの割合で長くなっている（それのことから、このパルサーの年齢は1500年ぐらいと非常に若く（パルサーができたときの超新星爆発の残骸に覆われている）、さらに400兆ガウスもの超強力な表面磁場をもっていることが導かれた）。ふつうのパルサーの表面磁場は1兆から10兆ガウス程度なので、ふつうのパルサーより100倍くらいも強力な磁場を有しているのだ。このような超強力磁場パルサーをマグネターと呼ぶのである。

さて、通常のパルサーが“磁転星”なら、マグネターは“磁強星”ではいかが？